

5

司馬凌海

生涯と遺跡についての若干の知見

高橋 昭

司馬盈之(凌海)については、新潟県佐渡の山本修之助氏が著された『司馬凌海』(昭和四二年)、『司馬凌海先生』(昭和五三年)、『写真集・司馬凌海先生―その遺墨と遺品』(昭和五六年)の三冊に詳しい。また、司馬遼太郎著『胡蝶の夢』では、その主人公として「伊之助」の生涯が克明に描かれている。しかし、医史学の面からは、入沢達吉教授の『司馬凌海伝』(昭和五年)と山本成之助氏の『司馬凌海年譜』(昭和十六年)以外には断片的なものしかなく、近年の報告、とくにかつて凌海が短期間ではあったが在住したことのある名古屋時代のことについては関係者からの報告は皆無に近い。

今回は、凌海の生涯と、顕彰碑や墓石などについて若干の知見を報告する。

一、略歴

凌海は天保十年(一八三九)十一月二十八日に佐渡国さわだ雑太郡新町村一二番屋敷(現新潟県佐渡郡真野町新町)にて出生した。父は栄助、母はらく。佐渡の相川にて幼少期の教育を受け、嘉永三年に江戸に出て、儒者山田寛に漢学を学ぶ。嘉永五年から松本良甫と佐藤泰然に蘭学医学を学ぶ。安政四年にポンペが長崎に来朝、西役所(海軍伝習所)で開講したポンペに松本良順とともに聴講した。文久元年六月、長崎伝習所を有罪除籍され、平戸へ移り、一時同藩医関口等伝の養子となった。文久二年、『七新葉』を出版。文久三年一月長男亨太郎が出生。慶応四年戊辰戦争が勃発すると、英国人医師ウィリスに随行して通訳として活躍、明治元年新政府の成立とともに「医学校」(旧幕府の「医学所」が復活、今日の東京大学医学部の前身)の三等医学教授に就任、次々と昇進した。この頃、東京下谷にドイツ語の私塾「春風社」を創設、明治五年には佐藤尚中とともに大教授となり、日本最初の和独辞典『和訳独逸辞典』を刊行した。明治七年文部省、宮内省を辞し、明治八年には「春風社」を閉塾した。明治九年五

月に愛知県から招聘され、「公立病院」、「公立医学講習所」に就任し、翌十年四月満期解職するまで、勤務した。明治十一年ころ肺結核を発症し、同十二年（一八七九）三月十一日に上京の途次、神奈川県戸塚にて客死した。

二、ポンペ（松本良順）の門下生を除籍

ポンペが来日した時代はまだ蘭学禁止令が有効であった。このため、公式にはポンペに師事することができず、このため幕臣である良順の門人としてポンペの講義に陪席する型がとられた。その門人名簿に「文久元年夏六月有罪除籍（後復籍 司馬凌海（元島倉太仲）」の記載がある。凌海はその翌年の文久二年に『七新葉』を刊行しており、当時はその準備に没頭していたと思われる。凌海は無断でポンペの書齋に出入りし、その蔵書を読み耽ったため、ポンペの顰蹙を買ったといわれる。これが、除籍の原因であった可能性がある。

三 名古屋時代

凌海は明治三年ころ、東京築地の外人居留地にいたドイツ系米人ヨングハン（ヨングハンスなどいくつかの名がある）について、ドイツ語を学んだことがある。ヨングハ

ンは愛知県最初のお雇い医学教師として、明治六年から三年間名古屋の「医学講習場」に務めたことがあり、その後任として明治九年五月に「ローレツツを教師に、司馬を副教師兼訳官」として招聘された。名古屋では、曹洞宗大光院に起居し、幾つかの訳書を完成させた。ここで、後藤新平は書生として、凌海からドイツ語を修学した。

四 墓碑、記念碑など

上記大光院境内には松本順による題額を持つ凌海の石碑があるが、近年破損が著しい。

佐渡の真野小学校には「司馬凌海君碑」が、また、生地に近くには「司馬凌海先生顕彰碑」が百年記念祭の折りに建立されている。

墓碑は戦前には東京本郷区千駄木町の総禅寺（豊島区巢鴨五丁目に移転）にあった。現在は青山霊園と佐渡の真野町にある。

（名古屋大学名誉教授）